

科学

V O L . 7 5 N O . 7 J U L . 2 0 0 5

特集

漢方から現代医療を問う

漢方の考え方〈証〉とは 寺澤捷年

現代医療における
漢方の位置 花輪壽彦

がんの転移 済木育夫

糖尿病 吉田麻美・大澤仲昭・花房俊昭

慢性腎不全 三瀧忠道

女性のための漢方 天野恵子

副作用と飲みあわせを知る 新井 信

佐藤祐造／荻原幸夫・雨谷 栄／渡辺賢治
秋葉哲生／赤瀬朋秀／本間行彦／福澤素子



〈新連載〉石 弘之 地球・環境・人間

〈総説〉

反物質の周期表はつくれるか 早野龍五

“獲得形質の遺伝”がおりえる 佐野 浩

生活文化史を植物から読み解く 辻 誠一郎

海底1万メートルの有孔虫が語る進化 北里 洋

教育体制の問題点と今後のあり方

今後の課題として現状の問題点をあげる。

① 教育スタッフの欠乏: 漢方医学に関する臨床経験を有し、しかも医学部教員となりうる研究業績を有する人材はそれほど多くない。しかも、特定の大学に局在しており、漢方の「伝統ある」大学でも専門家が不在というケースも少なくない。

② 実習体制の不備: 常勤の専門スタッフが少なく、講義は他大学の教員の応援によって実施することが可能であっても、漢方医学的な診察方法や鍼灸の行い方などの実習は、教員数、設備の関係上困難なことが多い。

日本東洋医学会では、教員派遣の要望に応ずる体制を整えてはいるが、漢方医学に関する「教員

養成講座」なども実施すべきと思われる。

わが国は、医師が医療保険制度下で西洋薬と漢方薬の両者を同時に臨床的に用いる全世界ではほとんど唯一の国である。漢方薬の有用性が確立されつつある現在、漢方医学教育体制がより一層充実することを期待したい。

文献

- (1) 社団法人日本東洋医学会学術教育委員会編集: 入門漢方医学, 南江堂(2002)
- (2) 佐藤祐造: 日本東洋医学雑誌, 56(1), 29(2005)
- (3) The Japan Society for Oriental Medicine ed.: Introduction to Kampo(『入門漢方医学』英語版), Elsevier(2005)
- (4) 漢方メディカルシンポ: 日経メディカル, 438 Suppl. 34, 34(2004)

特集

漢方から現代医療を問う

国際化が進む漢方医学

渡辺賢治 (慶應義塾大学医学部漢方医学講座)

わたなべ けんじ

果たして漢方医学が欧米で受け入れられるかを懸念する人も多いであろう。たとえば漢方医学の「証」(同じ病気であっても個人個人で治療法が異なる)という考え方や、気・血・水などという概念が果たして受け入れられるかどうか疑問に思うのはもっともである。しかし実際に、欧米から長期・短期の漢方留学生を受け入れられたり、海外との共同研究を推進する中で、相互理解は十分可能である、という確信に至った。

米国の動向

米国における代替医療への取組みは、ハーバード大学医学部 Eisenberg らが 1990 年に行った代替医療の使用に対する全米的な調査にその端緒を發する。この結果は全米に衝撃を与え、

補完代替医療に対する注目が一気に集まった。1992年には米国国立衛生研究所(NIH)内に Office of Alternative Medicine が設置され、1998年には国立補完代替医療センター(NCCAM)が発足して年々予算が増え、2004年には130億円超の予算となっている。NIH内にはたとえばNCI(国立がんセンター)のように補完代替医療に対して多額の予算を有しているセンターもあり、合計すると250億円以上の予算があるとされている。

この数年で NIH は大きな方針転換をした。1つはそれまで単一の生薬の研究しか認めなかったのが、複合生薬の研究をも承認したことである。2番目は2001年国際協力関係を強めるためにNCCAM内に Office of International Health Research(OIHR)を設置したことである。2003年には国際共同研究を推進するための助成を開始し、われわれもハーバード大学、中国伝統中医学アカデミー、香港大学とともに助成を受けた。

一方、臨床に関してはミネソタ大学病院において漢方薬の臨床研究を開始した。これは米国食品医薬品局(FDA)が認可した治験であり、一部 NIH の助成を受けている研究である。FDAの生薬製剤担当部署は漢方薬に大いに期

待している。そのいちばんの理由は品質の安定性にある。米国においては生薬製剤の研究のいくつかが品質の安定性を担保できないために頓挫した。このことにより NIH 予算の相当額が損失を受け、NIH, FDA の威信が揺らいだ。この経験から生薬製剤の品質管理に関してはかなり神経質になっている。1つの生薬ですら安定した製剤をつくるには高度な技術を要するが、日本の漢方薬の製剤技術は世界的にも最高水準にあり、複数生薬である漢方薬でもほとんど安定した水準に保つことを可能にしている。西洋医薬とともに医療用処方箋薬として用いられている所以である。

将来の生薬製剤市場を巡る国際的な動向

NIH の予算はいうまでもなく、米国の税金で成り立っている。その NIH が海外との協力関係を結ぼうとしているのはなぜであろうか。1つは年々10%近く増加する米国の医療費をどのように抑えるか、という問題がある。もう一方で生薬製剤の将来的市場は10兆円にも上ると試算されている。

この市場をめぐる中国・台湾・韓国では国策として伝統医学の海外進出を推進している。現在漢方薬は医療用として保険収載されているが、これを推進した武見太郎元医師会長の思いは、当時(昭和50年頃)、医薬品の7割が輸入に頼っており、逆にわが国から輸出できるものが非常に少ない、ということであった。日本の薬学は長井長義の麻黄からのエフェドリンの抽出に見られるように非常に進んでいた。しかし、その臨床応用となると欧米に一步も二歩も遅れをとっていた。30年前に武見がわが国の製薬事情を嘆いているが、今はもっと情けない状態となっている。医薬品の中で海外からの輸入の薬物はどれくらい占めるのであろうか？最近の薬価の高い薬品の多くは欧米からの輸入である。また、医療の現場で用いられている医療材料も多くは輸入品である。しかもいわゆる内外価格差により欧米で購入するよりもはるかに高

い値段設定となっている。医療費が高騰して患者、国の負担が増えているといいながら、国内産業を推進しようという国策はわが国にはないように思われる。国民の支払う医療費の多くが欧米に流れているのである。

研究レベルでみても然りである。高価な研究機器類から試薬に至るまで欧米のものが多く、やはり内外価格差によりその値段設定は欧米よりもはるかに高いのが現状である。

漢方医学は世界の統合医学のモデル

日本においては最先端医療と伝統的な漢方治療が同じ領域で併存している。現在世界は「代替医療(西洋医学の代わりとなるような医療)」から両者を組み合わせることでより良い治療効果を挙げる「統合医療」の時代へととなっている。漢方医学は世界の中でも最も確立した統合医学のモデルといえる。その診療のソフト面、製剤技術とともに Kampo Medicine(日本の漢方)はむしろ欧米において高い評価を受けるようになった。しかし国内での支援体制はまだまだ整備されていないのが現状である。日本人の悪い癖は、海外で認められるとやっとそれを認識する、という点であろう。10兆円ともいわれる生薬製剤の世界市場をめぐる水面下での動きが盛んであり、とくに中国、台湾、韓国は国を挙げて米国 NIH の助成金取得を推進している。昨年度行われた ASEAN+3 の保健大臣会議での議題の1つは伝統医学であった。自国の経済活性化のためにアジア諸国が伝統医学に注目し始めたのである。そこにはれっきとした国家戦略が存在する。しかしわが国の伝統医学である漢方に関してはその国際化をどうするかという明確な施策はない。

ではどこがイニシアティブをとって事を進めるべきであろうか。それはやはり国しかないのではないかと痛感している。残念ながら今のところ ASEAN や WHO 伝統医学部門からの投げかけにも対応する部署がないのが現状である。このままだと将来的に中国その他の生薬製品が

米国経由で日本に輸入される、という事態も十分あり得る。武見の意志とはまったく正反対に漢方までもが米国からの輸入品となってしまうのであろうか？

わが国も世界の保健衛生に貢献すべき

以上述べてきたように漢方医学は江戸時代にわが国独自の文化として花開き、医療用となって以来30年の間に西洋医学との間でさらに新しい文化として確立しつつある。これからも西洋医学との併用や使い分けなどに関してさらに発展を遂げていくであろう。こうした東西医学の統合した、新しい医療文化の形成は日本にしかできず、世界に誇るべきものとする。自信をもって世界に発信していくべきである。

現在のわが国の文化の多くは海外からの受容

により成り立っているが、本来わが国には優れた技術と文化が存在しているはずである。中でも医学の世界は米国からの受容のみで成り立っているように見受けられる。しかし日本の医療制度そのものが世界でも最も優れているとされているし、わが国の医療の中には世界にもっと貢献できるものがあるはずである。交通の発達やインターネットによりグローバル化は急速に進んでいる。漢方医学は医師数の少ないところではプライマリーケアとして、また先進技術を有するところでは統合医学として有用である。今後世界の保健衛生に貢献するために、日本のプレゼンスを示すことができるツールの1つとして漢方医学というものを捉えたらどうであろうか。

